
魔王になるためにはそれなりに事情ってものがある訳で。

あさおう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王になるためにはそれなりに事情つてものがある訳で。

【Nコード】

N2114V

【作者名】

あさおう

【あらすじ】

気が付いたら名前もわからない状態で知らない世界に・・・
ひどい場面に出くわして、でも見てるしかなくて。

その後暴れたりもするけど、どうやってこの先、生きていこうか・・・

今のところ冒険者になる予定だけど、はて。

第1話 迷い込んだらしい(前書き)

異世界に迷い込みなのか？

100ページ行き当たりばったりで書いていきます。

不定期更新、気持ちに乗ったら書きます。

主人公はチート予定だが、未定。

チョイエロ、暴言や差別的発言、好ましくないものがあつた場合は削除も考えますので一報ください

そつというのが嫌な方はバックおねです。

第1話 迷い込んだらしい

妙に暑い、40度はありそうな気温のなか、とりあえず岩山に沿ってある日影沿いに

とぼとぼと歩いていると半壊した馬車？と、、、争ったような形跡が有る。

辺りを警戒しつつ、そっと近づきながらもっとよく調べてみる

「まだこれ、新しそうだけど・・・綺麗な馬車だな」

ふと独り言をつぶやき、目線を先に延ばすと奥の方、林の入り口辺りで何か動いているような

なんだあれ？と思い目を細めると見えるのだ、100メートル以上離れているはずの場所が

はつきりと見える、、、目がよくなったというよりカメラが寄ったみたいに。

いや、それも驚きだが、やばい、あれは誰か襲われているんじゃないか？

そう思った時には体が動いていた、全力で疾走しながらも目が離せなかった。

残り50メートル、、、辺りには2人分の死体が転がり、争った形跡が有る、死体はハーフプレートの

鎧姿、破損した両刃の剣、頭が無かった。

もう一体はうつ伏せで、マントに隠れて見えないが生きてはいないだろう、、、、背中に剣が刺さっている

少し怖気ずいたが近寄ってはっきり見えた。全然間に合わなかった。

もうその子はすでに乱暴されていた……

5人ほどの男たちの玩具になっている、殴られボロボロになっている少女、

その脇で縄で縛られて転がされている騎士こっちはさるぐつわされ見張りだろう男に踏みつけられている

どうやら男たちは山賊のようだ、全員が皮の軽装備で武装はナイフに、剣に、弓か？

いかつい男達に怯む、、、、が、、、、しかし、みるみる冷静になっていく

すぐに助け出したいが、見えているだけで6人の山賊たち、、、、

ダッシュは小走りになり、そっと足音を消し始め、、、、そーっと岩陰と林を隠れ蓑に近づく

20メートルほどまで来て隠れる、耳を澄まし、、、、観察

「、、、、おっおっつおうう！うーふくいーおい！紙くれ紙w」
周りの男より一回り大きい裸の男が少女から離れながら言う

「、、、、ううう、ひつく、、うう」
さるぐつわされているのだろう、嗚咽が聞こえる

「よし、あとはおまえら、1人1回ずついいぞー 長くなるからな
壊すなよwww」
でかい男が体を拭き、鎧を着けながら促す

「ううー！うー！あああひつくあああ・・・」
完全に体の自由が奪われた体制で玩具になっている彼女はこれからの自分の末路に絶望したようだった

その奥ちよつとのところで踏みつけられ、蹴られつづけている、、、、
騎士は、、、、

血と涙と泥でぐしゃぐしゃになった顔、モノすごい勢いで涙が出
ていた、子供みたいに泣いていた。

動けなくされた上、一部始終を見せつけられて、尚、これからの事
も見せられるのだ。

・・・・絶望・・・・

すごい顔だった、山賊たちはそれを見てすごい大爆笑だった。

両腕両足を逆エビ状態で縄で縛りつけ、首を下げられないようにそこ
から首にも縄が回してある

さるぐつわを噛まされ、時に蹴られ唾を吐きかけられ、小便を掛けられそれでも見せ続けさせられた

一部始終を。

すでに3人目が終わっていた

「おめーらwはえ〜よwww」

4人目が鎧を脱ぎつつ代わりうとする

少女は、すでに気を失っているのかピクリとも動かなかつた。

時間にしてほんの10分有るか無いか、、、まさかこんな場面に出くわし

普通は間に会わずのこんなテンプレ間に会わずエロゲ展開の上敵は勝てそうもない山賊6人

このまま隠れてやり過ごしちゃうか、、、正直すぐ迷う。だって関係無いから。

大体まだ設定の「フワツ」としている今の俺じゃ・・・力になれない。

「とりあえず1周するまでに現状の確認をするか」
仕方が無いので様子をガッツリ見ながら自分の置かれた立場を考える。

白Tシャツにジーンズ、素足にスニーカーのかかとを踏んで装飾品は一切なし。

ズボンの右ポケットになんだらうか、銀色のコインが一枚。

遠くがズームしたように見えたりしたし、普通に気配が殺せたりするし……

なによりも、こんな場面に出くわしても冷静でいられる。

「ひよつとして、おれつつよいつてことでおk?」

いちいち声に出して確認するのは不安だからだらうか……
妙に自信だけはある。

盗賊ごときに楽に勝てる様なそんな予感。

ここは自分を信じるべきだらうか……しかし武器も何も無い。

頭らしき大柄の盗賊は鎧を着け終わると

ちよつと離れた場所にある強奪した荷物や馬の様子を見に行ったよ
うだ。

向こうにもまだ何人かいるのか……

漏れ聞こえてきた情報から、どうやら男たちは盗賊、騎士が護衛する
どこかの国のお姫様が

少数でひっそり移動中のところを身代金目当てに襲ったようだ。

すぐ近く、といても馬で半日くらい100kmくらいだらう
か、に大きめの都市があるようだ

後盗賊たちは普段はどうやら旅団、中の何人かはどうやら冒険者らしい。

ついでに聞こえた、どうでもいい話として、転がっている騎士は犯されている姫の婚約者らしい。

見た感じ2人とも10代だろうか、、

、、、、あーそうこうしてるうちに騎士が失神した。

少女は、正気を失っているようで失禁していたが、男たちは面白がって2週目に突入していた。

どうする？

第2話 町があるらしい

気配を消し、そっと近寄る。

騎士を踏みつける男の首をそいつの腰についでいた短刀を引き抜き
そいつで一閃し首をおとす、そのまま女の周りに移動すると裸の4
人を無造作に切りまくる

「うが！つごあ！！ぐぎゃ！！！！あつっ！！！！」

ドサドサドサ！

ん？1個足りない、、「つつ、いてーな！コラ！！っ？なにになに？
」

・・・ヒュン・・・

・・・ドサ！

「どーしたー？なにかあつたかー??」

間抜けな声でボスらしき男が帰ってくる、、、

「なんだ??こりゃ???」

辺りをキョロキョロと見渡しながら腰の短刀を抜いて今来た方に下
がりながら威嚇するボス

「おい！！！！ふっざけんろよ！！？だれだ！！？でて来い！！！！コラ！！！！」

姿が見えない襲撃者におびえているようだ、、と思ったらダツシ
ユで逃げた！

気配を消したままそつと走り去った方に駆けよつてみると、荷物係だろうか？

部下らしき2人ほどと馬を5匹引き連れて逃げようとしていた

まだいたのか、逃げようとしてるしこれ以上は必要ないと判断し戻るそれより早く解放してあげねば。

いまだすごい恰好で半ば自我がおかしくなりかけの少女と失神した騎士に駆け寄ると

拘束してあるロープを切った。

少女は拘束が無くなつても寝転んだままだった

介抱する気はなかった、汚いし。

まあ、哀れとは思うけど、こつちの世界の人間じゃないし、ぶつちやけあんまり罪悪感はない

でもかといつて男たちに汚されたまんまの淫らな格好の少女が寝転んでいるのだ

あんまりガン見すると「おっき」しちゃうんで、チラ見にしておいで、、、てか、騎士!!!!

騎士は、、、小便くさかったw

とりあえず死んではないようだし見当たる大きな傷は無い。

よし！現状だ、

見渡す限り向こうに2体ここに5体の死体、あつちのは騎士でここのは山賊。

んで、生きてるのが汚くて触りたくないというか、、ほとんど裸の汚い女1名と小便臭い騎士1名

とりあえず気配を消して林の中から様子を窺う事にした。
コインが入った小袋をばらばら死体から集め、初めに殺した首なし
死体からはマントもいただいた
とりあえず羽織っておけば目立たないだろう。

30分ほどだろうか、、、そろそろ起きてもーと思うのだが一向に
何も変わらない、、、

1時間はたつたはずだ、、、女が相変わらずえへえへ笑ってるだけ
だ。

・・・よし、ちょっと見てみよう、、、そっと近寄ろうとした時
に騎士が動いた!!!

「ううーん、ん？んん!!!」
気がつくとすぐに拘束が無い事に気がついた騎士はさるぐつつわを外
しすぐに立ち上がるうとして転ぶ

「姫！姫!!!ひいーめえー!!!」
女にためらわず抱きつき、泣き叫ぶ、ウオー!!!と吠える
分かっているのか、女がにっこりと微笑み返していた。

そんな感動的な場面から1時間ほど、今現在、騎士は自らが奪われ
たであろうやけに立派なマントを

死んだ盗賊からはぎ取り、姫と呼んでいる女をくるみ、両の手で眠
った彼女を抱き抱えて

自分の鎧を上半身だけ脱ぎ棄てると

私が元来た道を引き返す方向へそこそのスピードで走って移動していた

私は、約50メートルほど後ろから見失わないように追尾だ。

なぜ助けないか？面倒だからだ。

ここで手助けしても良い未来は見えない。

犯される前ならまだしも、事後では・・・口封じに狙われる可能性
まである。

そうでなくてもとりあえず町の位置さえ詳しくわかればとりあえず
メシにはありつけるし。

現在の武装は両刃の小刀1本とTシャツ、ジーパン、はだしにスニ
ーカー

コインが入った小袋4個に初めからあった銀貨1枚

上から茶色いつぎはぎだらけの茶色い皮の大きめのマントを羽織っ
ている

マントはフード付きで堅く、穴があくと上からまた何かの皮を張り
合わせて有るようでボロボロに見える。

目立たないのでこれはいい拾いものだ。

かれこれ1時間は走り続けているがほとんど疲れない。

それにしてもあの騎士はすごいな、舗装されてない、ほとんど荒野
の様な道を

人間一人抱えたまんま休まず走り続けている、ボロボロの体で。

そのまま走り林を抜けると、轍の何本もある大きめの道にぶつかっ
た、迷わず右の方へ走る騎士

正面には見渡すばかりの地平線と荒野の様な何も無い荒れた大地が広がっている

遠くの方に森が見える様な気もするが・・・
目を凝らすとずっと視界だけが近ずいてたしかに、森が見える。

遮蔽物が無くなった事で隠れる場所が無くなったため林から出れずに距離が離れるが、、

まあ、向こうに行けば町位の事は分かったしここまででいいか。

だんだんと日が傾き始め、夕方と言ってもいい時間帯になってきている。

騎士はもう見えないくらい遠くに行ってしまったているが、とりあえず明るいうちに

コインだけでも確認しておこうかと思いい4つの袋をひっくり返してみる。

・・・銅貨13枚、銀貨3枚、四角錐の濁った赤色の石1個、ポタン1個と・・・

4つ開けてなんだこれwすくなwww

1つなんて銅貨2枚とポタン1個だったよ！

手に入った銀貨は俺の持つてる銀貨とは全く違うものだった。

とりあえず初めから持っている銀貨は元の位置に仕舞い、

新たに手に入れた硬貨は全部まとめて一袋に入れ

赤い四角錐の謎の石は別の袋にポタンと入れ

空の袋と一緒にジーパンのベルトに括りつけた。

フード付きの堅い大きめのマントを深く被れば中はよく見えないは

ずだ。

しかし、このフードを着てから妙に涼しい。

時間的な物もあるだろうがそれにしてもまるで爬虫類の肌のようにひんやりする様な涼しさだ。

ちよつと濡れた皮の様な独特な匂がアレだが、それだけ我慢すればかなり気に入った。

日が落ち切る前に町なり村なりに入り込みたいが・・・

もしかしたら逃げた奴らが仕返しに来るかもしれないし、なにより知らない土地で1人は心細い。

あのペースで走り続けれるはずがない、どっかで休んでるはずだ。

騎士の行った方に町が有るのは確実、急ぐ旅でもないしゆっくり歩いて追いかけた。

途中、ダツシユを繰り返してみたり、ジャンプしてみたり、気配を消してみたり

魔法を打つてみたりした、魔法は出なかったがw

こんな世界なら出来るかと思っじゃん、魔法・・・

こう、手に力を集める感じで集中して

「かーめーはーめーーーーーーーウエエエブウ！！！！！！！！」

つてやってみたけど、何も出なかった、大丈夫、かなり確認したから誰にも見られてないはずだ。

あと、遠くを見る能力はどの位まで見えるのだろうかとそれも試した。

結果

騎士たちどうなったかなーって見ようとしたら、見えちゃったW
結構この能力はつかえるかも！

こっちからは見えないけど結構先の方なのかな？木の陰のバス停み
たいな小屋で休んでいた。

少女は寝たままなのかマントに巻かれていて見えないが。

このままもし追いついたとして、俺のこのマントは盗賊から奪った
ものだし

見覚えがあるはず、盗賊と間違えられる可能性がある。

かといって気に入ったし捨てたくはない。

いや、脱いだらむしろこの服装では不審人物だ。

どうやらこの世界で俺の格好は浮いている。

それくらいは分かる。

かといって死体から服を剥がして着るのは、、、嫌だ。

とりあえず暑いし目隠しにと思って盗ったマントだがこれが無かつ
たらやばかった。

鞘も無いむき出しの両刃の少し血で汚れた短剣と同じようにちょっ
と血がついたマント

顔を見せないように深く被って……

どう考えてもアウトだろう。

不審者以外の何物でもないよなあ……

まだ意識が覚醒してから半日ほど、記憶もなんかフニャつとしたま
ま名前も思い出せない。

ここで見た生き物といえば騎士と盗賊と半裸の女、後は馬だけ
情報は少ないが俺の知識があてになるのなら……

この世界は俺の生活していた世界じゃない。
どういうわけか知らないがここへ迷い込み、記憶がフニャっとして
いる。

前の世界の記憶は部分的にはあるのだが、名前とかがすっぱりわか
らなく・・・

能力についてもだ、こんな力は前は無かった、はずだ、たぶん。
運動能力も記憶の中の自分より大分高い気がする。

なにがあつてどうしてここに自分がいるのかは分からない、、、が
どうやら夢ではない事だけは確かだ。

この半日の間になんか色々あつた様な気がするが、、、、
あまり実感がないというか、ちょっとびびる事もあつたが基本有り
えないくらい自信满满で

何人も男たちを不意打ちとはいえ切り殺し、
女の子が酷い目に遭っているのを放置して観察し、

しかし、まったく心に罪悪感など欠片も湧かない。
いや、初めは有った様な気がするが、、、今は全く無くなった。

自分がこの世界の住人ではないとはつきり意識し始めてからはこの
世界の人を人と認識しなくなった

死体を見ても、汚い、以外の感想が湧かなかつたのはそのためだろ
う。

まあ、そのくせ女の裸にはきっちり反応したけどw

大分暗くなったので大胆に距離を詰めても大丈夫だろう。

千里眼と呼ぶ事にしたこの遠くが見れる能力を使って、そろそろ走り出した騎士の跡を追う。

大分走ったか、、、町なのか？遠くに光が見える、千里眼で見ると城門の様なものが見える。

騎士が少女を抱きかかえたまま城門前の橋の上から叫ぶのが見える、俺はしばらく観察だ。

兵士が何人か出てきたと思ったら城門が開いた。

おいおい、結構な夜中だぞ、まさか開くとは思わなかった。

そのあとしばらくその場でガサガサしてたんだがどうやら馬車を呼んだらしい。

・
休む場所もないのだろうか？どさくさまぎれに侵入したいのだが・
兵士があんなにいては近寄っただけではれるだろう。

馬車は来たのだが夜中に騒いでいたためか、結構住民らしきやじうまがチラホラ見れるように・・・
兵士におっぱわられているが・・・

皆がそつちに集中している間に、気配を消しておもいきって近づいてみた。

なにこれ？

結果ですが、、、大成功！

どうやら俺が気配を消すと存在が認識されなくなるらしい。

微妙な言い回しで申し訳ないが、調子に乗って相当近くまで行ったけどきずかれなかったw

とりあえずこの能力、っていつてもいいでしょう！この2個目の能力は

「ステルス」と名付けた。

だってまじで見つからないんだもんw

気配を消そうと思っただけ〜いや、ステルスを発動させると、俺は透明人間になるw

いや、初めに盗賊殺したの、、あれ実力じゃなかったねw
そりゃ見えてなきゃ楽勝だわw

っーか、ずっと遠くからつけて〜とかwハズカシノノノノ

気を取り直して〜

とりあえず町かな？中に入れた。

門を入ってすぐでっかい道がまっすぐに城の方まで続いていた。

その道の両脇には真っ暗な中に光がチラホラあり、その光は家のような建物から漏れていた

馬車がついて騒がしくなりつつあるとやじうま達も相当数が遠巻きに見守るようになり

それに紛れるようにして混じる。

もちろん気配は消したままだ。

どうやら真正面に立ったりぶつかったりするとその相手にはステルスは無効になるようだ。

ヤジ馬達に色々試してみたりしているのだが詳細が大分つかめた。

あとは情報収集に聞き耳を立てているのだが

曰く「姫様が何かに襲われて怪我を負った」だの

曰く「姫ではなくて近衛隊の誰だかが重傷だ」だの

「・・・これもし魔獣だったら懸賞金がギルドから出るぞ！」だの
・
・

ん？

魔獣？懸賞金！？つかつかね、金！！んん？ギルドだろう？
聞き捨てならない事を聞いた気がする。

声がした方に振り返るとフードの、周りの奴らより頭一つでかい男
が隣の男と話していた。

「明日一番でギルドに行つて聞いてみましょうか？

遅い時間までだから飲んでいるのも、たまには役に立ちました
ね。」

小綺麗な軽装備のダガーを腰に差した青年だろうか、、、後ろか
らで顔は見えないが。

彼らは興味を失ったのか、移したのか、野次馬から離れ正面の道路
から枝のように伸びる横道

その内の一つに入っていく。
それをステルスを発動したまま追う。

すでに能力の事は分かっているのでほんの3メートルほど後ろを大
胆につける。

路地に入ってすぐ、酒場らしい・・・

・・・ギイ・ボタン・・・ギイギイ・・・ボタン・・・ボタン・・・ギイギイ・・・

！？大柄な男が急に振り返る、ヤバ、視線をかわすためしゃがむ。

不思議そうな顔をして大男が前を向き直し、カウンターの方へ向かう
「どうしたんですか？」

小奇麗な青年が声をかけ
「べつに・・・」

と答える、男。

せつかちすぎたようだ、冷静にならなければ・・・
ぱっと見そこそこ広い店内にカウンター10席ほどとテーブル席が
2席。

壁際でたるにもたれかかっで寝ている吟遊詩人みたいなやつがいる。
ハープみたいなやつ持ってやがるw

あとテーブルでトランプか？なにか賭け事やってるらしき4人。
カウンターには今来た大柄と青年以外にドレスの女と口説いている
男がいた。
ん？

ここには2Fが有るみたいだ。
カウンターの脇かららせん状に階段が有り吹き抜けの高い天井から
見える2Fの部屋、、、、
見えるだけで5部屋あるぞ？

なるほど、ここでは女性をお金で買える、そういうことらしい。
おっさんが交渉が成立したららしく階段を上って行った。

さて、ずっと入口横から見てたわけだが・・・
ここでステルスを解き、わざとらしくドアを鳴らし店に入った様に
装う。

特に視線も感じないままさつきまで女性が座っていた席に座る。
すでにテーブルは片付いていたが、うつすら椅子が温かった。
フードをとらないままバーテンに水をたのむ。

水差しから注がれた水がテーブルに置かれる

「すまない」

そう言つて銀貨を一枚テーブルに置くが、指は載せたままだ。

目を見開くバーテン・・・

「情報が欲しい」

続けて俺が言う。

「・・・あんた、何事だい？今しがたの門のことかい？」

バーテンが怪しんだ目で訝しげそうに睨んでくる。

「いや、そう言うんじゃないやなくてだな、」

「兄さん見かけないよな、もしかしてこの街は初めてなのか？冒険
者だよな？」

いや、何も考えてなかった・・・適当に合すか？

「おやじ！聞こえないのか！！！」

さっきの大柄な男がバーテンに吠える。

「部屋だ、こいつと2部屋頼む、金はこいつで頼む」
銀貨を一枚テーブルに置く。

「まいどー、部屋は203と204使ってください。」

2人が階段を上がっていく、、女性を買わずとも寝れる様だ。

いまカウンターには誰もいないバーテンと目が合う・・・
銀貨から指を離しその指で近くに来るように指で招くとバーテンが
そっと近づく。

「聞きたいのは、もっと簡単なことだ。」

バーテンが頷く。

第3話 酒場で分かった事

俺は、とくに深い検索を受けないので自分の事は一切黙ったまま知りたい事だけを聞きまくった。

貨幣価値、、、冒険者なら一日銀貨2〜3枚有ればそれなりに生活できるとか

武器やも防具やも道具やも服やも、店は大体大通り沿いにある事、食堂や宿、酒場なんかは城門付近に大きな道を挟んで右側に多く左側はギルド私有地となっているとか

この国は絶対王制で貴族や王様がいることだとか

奴隷もいるし獣人や亜人、魔王や魔族なる者もいるらしい
魔法もよくわからないのだがあるようだ

ほかにも、ここの門は街へ入る度、銀貨1枚税金で取られることとか（俺はステルスでタダだが）

16歳未満と奴隷、女性はタダだとか、この店は夕方から朝までの営業だとか

上の部屋は一晚銅貨30枚だとか、飯は無いけど、シャワーとトイレが付いているらしい事

飯も別料金で出来るってことと、今日一番のお勧めの子がアレの日で休んでいるのでいない事など

いる事もいらぬ事もじっくり聞いた、たまにトランプの連中が騒いでいたが。

ギルドの事や冒険者についても詳しくわかった。

貨幣価値なんかの基本的な事をほかすでもなく聞く俺に怪訝そうな顔だったが

適当に何かアルコールでも飲むように促し、俺はまた水を一杯もらい話を聞く。

何でもギルドは24時間やっている、大きな道に出て反対側にデカデカとある2階建ての建物。

周囲が空き地なのですごく目立つらしい、この国の冒険者ギルドだ。ランクってやつも聞いた、SクラスだのAクラスだのはすごいらしい。

初めはFである程度実力が有ればDからってこともあるらしい

まあ、金が0だと有無を言わずFかららしいが、すぐに上がるだろうと安易に思考を切り上げる

ギルドは他にも商業ギルドや色々あるらしい。

家とか買ったたり、商売とかするならお世話になるらしいが……なぜ俺がギルドに食いついたか？それは、身分も住所も何もつての無いこの世界で

俺が生き抜くために金を稼ぐには魔物を狩ってそれを売りさばくか冒険者としてギルドに登録して依頼をこなして褒賞を得るか

銀貨2枚と銅貨10枚ほどしか所持金が無いので選択肢が乏しいのだ。

今日宿に泊まれば、明日は稼がなければ金が無い。酒のボトルが1本銀貨1枚位だったのは分かった

冒険者になれば簡単な依頼でも銀貨2〜3枚にはなるらしい。

そう言えば、金と別に持ってたあのくすんだ赤い石、あれも何かわかったんだが

「魔晶石」らしい

魔石がいくつか集まって結晶化したものらしい。

原理とかは詳しくないのでわからないが、魔力を蓄えたり放出したり出来るらしい。

魔力って何？って聞くと、それは魔術師にでも聞けと言われてしまった。

どこにいるか聞くと、びっくりした顔で「冗談だよ」とつぶやいていた。

魔法に関してはなぜか意思の疎通がうまくいかない、なぜだ？

まあ、よくは分からないが大型の魔物が死んで消えたあとに残ったりするのでギルドで買い取りしてる

魔石位だとそれでも銀貨1枚とからしいが俺の持ってるの位綺麗な結晶だと金貨1枚位かなと

バーテンが目利きした。

こいつを売るのにもギルドに行かねば・・・

あ、そうそう貨幣価値だが、、貨幣はこの国では大まかに5種あるようだ

30円相当の銅貨、盗賊から13枚かな？入手。

3000円相当の銀貨、盗賊から入手した奴だ。

3万円相当の黒鉄貨、王国貨とも呼ばれていて王国内で通用する、騎士達の給料はこれで支払われる

30万相当、金貨、純金にしては堅いので合金だろう。

金銀銅貨はこの世界では共通に使えるらしいが黒鉄貨は王国内だけの流通らしい。

最近この黒鉄貨の価値の暴落が酷く実質半値くらいだとバーテンがぼやいていた。

また、これら以外に希少金属で作られた硬貨があり、それらの価値は金貨の100倍らしい。

とりあえず今日明日の寝床で金の尽きる俺には夢のような話だw

とここまで話してふとギルドやってるなら行ってみるか！と思う。

「ごちそうさん、ギルドいつてみるよ、また、くる。」
そう言つて2枚目の銀貨をテーブルに置き、椅子から立つ。

俺に魔物、、狩れるんだろうか、、姿形にもよるが、どんな奴か見てみないとな。

そんな事を考えながら店を出ると、すでに外はぼんやりと明るくなつていた。

まだ早朝で誰もいない道を歩きながら教わったギルドを目指す。
例の巨大な城門から続く大きな道があり、向こう側に2階建ての大きな白い建物が見える

確かにすごく目立っている。

あれか、、ギルドってのは。

門の周囲はまだ警戒しているのかピリピリしているようだった。
朝からおつとめ御苦労さまである。

第4話 ギルドでは

ギルドの入り口は3段ほどの階段があつてその分高くなり半円形の屋根があり、その屋根の下、真中に扉2枚ほどの空間が開きっぱなしで開いている。

若干入口が高くなっているその建物に近ずき、さっそうと階段を駆け上ろうとしてすべる

「うおつと!!!」

思わず声が出ちゃったが、転ばなかったのでセーフだろう。

まさかタイル敷きしかも朝の清掃した手なのかうっすら濡れてた。

奥のカウンターで受付のおねいさんらしき人が口を開けてこっちを見ているが、、とおもったら

きずいたのかはつとして、にっこりこちらを見て微笑んできた。

くっそ、みられてたノノノノ

こけた拍子にフードから頭が出てしまったので赤い顔がモロミエだ。

綺麗なタイル張りの床、磨りガラスのはまった窓から入る光、

清潔感の溢れるエントランスとすがすがしい観葉植物の緑。

良い趣味だ。

受付の両脇に上と下へそれぞれ向かう受付の後ろへと向かうカーブを描いた広い階段がある。

受付の後ろで上下に階段が重なる様に存在している。

右手の壁は何か紙がびつしりと張ってある、その奥にも空間がありそうだが・・・トイレか？

左手は窓際いっぱいテーブル席が5席並び、奥の部屋がこちらもありそうだが、、VIP部屋か？

早朝のためか受付のこ以外誰もいないのだが、、、、

「・・・んつと、おはよう」

取り繕って挨拶を、さも平然とする。

「・・・クスッ、おはようございます、本日はどのようなご用件ですか？」

「・・・くうくにこやかに返されてしまった。

「ギルドへの登録と、魔晶石の買い取りを頼みたい、後できればさっきの事は忘れていただきたい」

俺は一気に言い切った

「新規の御登録ですね？お名前と連絡先など、こちらの紙に記入後2F1番窓口をお願いします。

分からない、無い、秘密にしたい、などの場合は空欄で結構ですが、嘘の情報はおやめください。

魔晶石ですが、素材の買い取りは2F2番窓口です。

最後の件についてですが、素晴らしいモノが見れました、あの表情プツツ忘れてたくてもプツむりです。」

この女、、、、

「いや、アリガトウ。」

片言だが礼儀だ、お礼は言っておこう

「ドウイタシマシテププッ」

片言で返事をしてくる受付嬢。

2階に上がると銀行の様な受付が幾つか並び其々に如何にも事務的な地味な服のおっさんがいた。

1番窓口の横で紙に書こうとして固まる……

「すまん、字が書けないんだが……」

気まずそうにおっさんに話しかける

「ああ、大丈夫ですよ、代筆しますお名前と、そうですね、連絡先いただけますか？」

決った場所が無いならホームとしてこのギルドに登録するので3カ月に1度程度は顔を出してください

それが無理な場合は事前に報告、それが無いまま3カ月過ぎると失効となります。」

「なまえ、、、名前は、、、とりあえず、連絡先はギルドでいい。あと名前なんだが偽名、、、でもいいのか？」

「はい、かまいません、この後血液の採取と魔力による個体識別検査の結果

犯罪歴が特に問題無ければギルドに登録となりますが、、、登録名と言う事になりますが

これは本名である必要はありません、魔力による個体の識別は出来ませんので。」

「なるほど、登録名ってのは自己申告の識別用ってことか」

「そうですね、本名を名乗るのが普通ですが、源氏名ってやつですか？そういう方も結構おられます」

キャバクラかwとか一瞬思った。

前の世界の知識がたまに顔を出すのだがキャバクラ、いったいなんだろう？

とても楽しそうな名前なのだが・・・

なにも思いつかないので名前は「偽名でたのむ」と言い、求められるまま針で中指を刺す

「ギメイ様つと」そのまま記入して血のついた針を回収。

「しばらくお待ちください」と告げ奥に入って行った。

血の出た指をどこで拭こうか見ていると2番の窓口のおばさんが声を掛けてきた。

「テーブルの横のコップに入った液体がポーションだよ、傷口につけるといいよ」

言われるままにコップの液体に指を付けると一瞬ぞくつとして・・・指先を見てみると怪我が治っていた。

ポーションすげー!!!

「クエストの申告のたび針で刺すことになるから、回復役は常備さね」

おばさんが胸を張って教えてくれる。

「いや、何も知らないので助かりました、ところで2番は買い取り

ですよ？

「こちらが終わったらお願いします。」

「あら、今日登録なのにもう素材持っていると、優秀なのね。」

「そんなこと無いですよ、運が良かっただけです。」

おばさん相手はペースが狂う・・・

この後登録もすんなり終わり、魔晶石もとりあえず売れた
売る時おばさんに色々聞かれたが、でも結局うまくごまかして
金貨1枚と銀貨25枚、金貨1枚分稼いだってことでランクもいき
なりだがEになったか。

ギルドカードってやつももらった。プラスチックみたいな曲がる金
属に名前と連絡先、ランクと獲得報奨金が
後何か書いてあるようだが全く分からない、、

言葉は通じているのに字は全く見覚えが無かった。
数字だけは記憶にあるものとはほぼ同じなのだが・・・6の形が微妙
に見難かったくらいか

そろそろ朝食にはいいだろう時間になったし、腹が減って仕方が無
い。
なにしろ昨日の昼過ぎ位から何も食べていないのだ。

地下の食堂兼酒場で食事が取れると言うので金も手に入ったし直行

と言っわけだ。

2階から降りるとさっきまでは誰もいなかったエントランスに人がチラホラいて

地下ではすでに朝食を食べている冒険者達や、朝っぱらから飲んでいるアル中もいた。

「何か軽くつまめるものを2食分と水を頼む」

俺を見つけてすぐに飛んできた案内？の女の子にカウンター席に通されながら注文する

生水は注意しないとな・・・

急に頭の奥からそんな言葉が浮かび上がる・・・

出てきたのはポリウーム万点の大盛りハムサンドと溢れんばかりのポテトフライ&ケチャップ

が皿に乗って2皿やってきた。

飲み物とセットで銅貨15枚、俺は30枚か・・・

銀貨を1枚持ってきた給仕の少女に渡し、何か肉みたいなものも持つて来いと頼む

ハムサンドとポテトフライを1皿やつつけたところで鳥のもも肉的な物が出てきた。

ただ、サイズが、、でかい。

普通に3kgはありそうなもも肉。

ぶっちゃけ俺が抜き身でここまでこっそり持つてる両刃の短刀より大分重い。

短刀とはいえ鉄の塊より重い肉の塊

味はあっさりした非常に淡白で上品な鳥肉。

それでいて非常に肉の質が厚いというか、、食い応えがある、、

歯ごたえも十分以上であり、噛めば噛むほどに味わい深く……
美味であった。

丸1日ぶりの食事とはいえ、朝から、寝てないので正確には違
うのだが

朝っぱらからすごい量の食事を取っている俺は目立っていたようだ
・

さすがに朝から変な奴はいなくて絡まれる事もなく大丈夫だったの
だが……

今現在、金貨はズボンのポケットに、
銀貨と銅貨をそれぞれ別々にして皮袋に入れ、口を固く縛って両の
腰に其々つけている。

鞘の無いむき出しの短剣は腰の後ろ側のベルトに差してある。

飯を食っただけなのにやけに注目を浴びているのが苦痛でフードを
深く被り、

腹もよくなつたしせつかなのでクエストつてやつを受けてみるか
など依頼が貼つてある1階の
ギルドに入って右側の壁に向かった。

丁度これから今日の分の依頼書が張り出されるところらしく何人が
がすでにスタンバっていた。

とそこへ慌ただしく煌びやかな鎧を着て、顔まで覆う金と銀で出来
た兜の重装備で

美しい白いマントに包まれた騎士らしき者が2名入ってきた、と同
時に1人が何か紙を見せ

もう一人が宣言する

「城からである、昨日から今朝にかけて東の森方面へ出かけた冒険

者すべてに、

城への出頭命令が出ておる。本日中に速やかに出頭するように。」
紙を開いて見せていた騎士が紙を受付へと渡すと綺麗に2人揃った足並みで出て行った。

辺りはざわついている・・・受付もビックリしているようだ。
しきりに肩についているバッチに向かって何か話している。

俺には関係なさそうだと依頼書を見る。

うん、読めないね、、、

騎士の登場でにぎやかになりつつある周囲に嫌気し
気配を消しこの場を立ち去る事にする。

あとは適当に装備を固めて宿も決めて、まとまった金が入るまで狩りで何とかするしかない

幸いステルスと千里眼と言う便利な2つの能力のおかげで狩りに関しては心配はあまりない。

ステルスさえ使えば近寄り放題、逃げ放題。
常に先手が取れる。

千里眼は周囲1kmほどの探知や意識した人物や場所の現在の状態がわかる。

まあ、常に発動しているわけではなく、意識しないと見えないが。それと結構疲れることも分かった。

いや、短い時間ならどうってことはないんだが1時間とか見続けるのはきつかった。

ちゃんと顔を見て個体の認識さえすれば離れていても見えるのは便利だ。

いや、すっかり確認してある昨日の姫、あれからも気になって様子

をちよくちよくみてたんだが
おかげで能力を使いすぎると疲れる事がわかった。

え？姫？？うーん、端的にいうとほぼ寝てた。

ちなみに騎士はあまり昨日みなかったせいなのかどこにいるのか分からなかった。

確かに半裸の姫ばかり見ていたような気はするけども、、、

ギルドを出て大通りを城の方にそのまま歩く

少し上り坂になっていいる道を歩いて行くとだんだん人通りが出てきて賑やかくなる

道の反対側には露天が並び、青空市が開かれている。

こちら側にはしっかり店舗を構えた立派な店が立ち並び、そろそろと開店しているようだ

ようやく街が動き始めたのかうつすらと美味しそうな匂いがどこから漂ってきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2114v/>

魔王になるためにはそれなりに事情ってものがある訳で。

2011年10月9日12時37分発行